

# 見つめ合い ホルモン上昇

麻布大と自治医大が確認

2009. 1. 25

## 人と犬、きずな強める働き



見つめ合いホルモンの働きを調べる実験に協力した犬は、麻布大の犬舎で飼育されている。提供：麻布大犬舎

愛犬に見つめられると、相手への信頼感やきずなを強める働きのあるホルモン「オキシトシン」が飼い主の体内で増加することを、麻布大と自治医大の研究グループが二十四日まで確認した。

オキシトシンは、哺乳

類の母子関係や夫婦のきずな形成に関係していると考えられているが、異種間での作用が確かめられたのは初めて。「見つめる」という行為がオキシトシン増加を招くことについて永沢美保・麻布大助教（比較認知科学）は

オキシトシン ホルモンの一種。人間では脳の視床下部などで作られ、母乳を分泌させたり、出産時に子宮を収縮させたりする働きがある。分泌や作用を妨げられたマウスは、授乳や子育てができなくなることが確かめられている。人間でも、投資ゲーム参加者の鼻に噴霧したところ、相手を信頼して、より高額な投資をするようになったとの研究結果が報告されている。

「目は口ほどに物を言う」と言われるが、人間と犬の間でも視線が重要なのだろうと話している。研究グループは、五十五組の飼い犬と飼い主で実験。室内で一組ずつ、三十分間触れ合ってもらい、実験前後の飼い主の尿に含まれるオキシトシンの濃度を測定した。

すると、事前アンケートで犬との関係が「良好」と判断された飼い主十三人では実験後に濃度が大きく上昇したが、「普通」の四十二人では変化が無かった。良好群の実験後の濃度は、普通群の約

一・五倍と高かった。良好群の実験を撮影した映像を分析すると、犬が「遊ぼうよ」と飼い主を見つめたのをきっかけに交流した回数が多いほど、実験後の濃度が高くなっていった。

一方、犬に顔を見せないよう飼い主が壁を向いたまま触れ合う実験では、五十五組すべてで濃度変化は表れなかった。

懐かせる薬よりも面倒見る方が大事 研究グループの菊水

健史・麻布大准教授（行動神経科学）の話 オキシトシンを利用すれば、なかなか飼い主に懐かない犬を懐かせる薬の開発につながる可能性がある。しかし、オキシトシンは人間だけでなく、散歩や餌やりなどを通じて犬の体内でも少しずつ分泌されるようになると推測される。薬を使って懐かせるより、犬を思いやって大事に面倒を見てやるのが大切だ。